

○ **生きづらさを感じる児童等への支援について**

その他の質問

・市長の市政運営方針について

市民の会  
**富士根信子**議員



**問** 勝山市の支援体制はとも充実している中、気がかりな子どもたちの発達障害の早期発見や支援開始の対応に必要な専門医のいる診療機関が勝山市には一つもない。

**答** ①福井勝山総合病院に診療科の設置を働きかけてもらえないか。また、5歳児の相談対応をしている保健師が10名程度であり、相談体制が充実しているとは言えないのではないか。

②その相談に対応する人員や相談支援の場が少ないと感じるが、支援についての現状と今後のより良い相談、支援体制の考え方について聞きたい。

**答** ①福井勝山総合病院における専門医による診療科の増設については、医療人材の確保は課題が大きく難しい現状だが、アフターコロナにおける課題の一つとして、機会をとらえ提案していきたい。

市では、1歳6か月児、3歳児、5歳児健診で発達等の気がかりな幼児については、小児発達専門医や臨

床心理士、言語聴覚士に相談ができる「のびのび相談会」を実施している。継続した支援が必要と思われる幼児には、臨床心理士による「ことばの育ちの教室」の利用を勧めている。

また、平成29年からは、専門医療機関の受診を待たずに市内小児科医の意見書で、ことばや発達に関することで療育が必要な方を対象とした「大野市児童デイサービスセンターくれよん教室」を利用できるように

なり、適切な時期に療育ができる体制が整っている。②学校生活や友人になじめない児童・生徒に、家庭・学校等以外の社会性を育む場を提供し、健やかな発達を支援するため、令和3年度当初予算に児童の相談・居場所強化事業として140万4000円の委託料を計上した。こうした事業は短期間で成果が現れるものではないが、10年後、15年後に関わった児童等が自立した生活を送れるよう、事業効果を高めていきたい。

○ **新たなIT化推進策の発現とその支援策**  
○ **\*SDGsの捉え方と進め方**

※SDGs：持続可能な開発目標

※ESD：持続可能な開発のための教育

市民の会  
**中山光平**議員



**問** 市民と行政との双方向性のあるアプリ開発を、市在住の小中学生がメインプログラマーとなりプロトタイプ（試作品）を作成した。このような民間活力の発掘、支援、連携を通じ、市民の利益としていきたいと考えるが、いかがか。

**答** 市民と協力しながらアプリケーションの開発が進められていることは、子どもたちにIT化を身近に感じさせ、イメージを膨らますことに大きな刺激となる。開発者とも連携を図り、教育の場に取り込むことも研究していく。

**問** SDGsが掲げる広範囲な目標を進めることは、市にとって多大な負担になりかねない。限られた予算、時間、人員の中で、市の利益となる事業に集中して持続的に取り組む必要があるのではないか。

**答** SDGsは、世界全体の社会変革に向けた目標で、中には地方自治体にとってなじみにくいもの

あるため、各自治体の独自性や課題などを踏まえた目標に整合性をもって置き換える必要がある。

現在、勝山市が進めているまちづくりの方向性は、SDGsが掲げる基本理念やゴール、ターゲットと方向性が一致している。また、小中学校を中心に取り組んでいる\*ESDは、その視点がSDGsと同じく持続可能な社会の構築であり、ESDの推進によってSDGsを担う次世代が着実に育ってきていると実感している。

